



「KOMABA DAY」は月に一度実施している日で、世界で起こっている様々な問題に子どもたちが触れる機会を作っています。また、同日は募金箱も設置します。集まった募金は災害などの緊急支援や KOMABA の開校以来、その活動を応援し続けているトータルペインター・ミヤザキ ケンスケさんのプロジェクト OVER THE WALL に役立てられます。なお楽しみながらの活動を目指しているため、「KOMABA DAY」では講師は私服で授業をし、生徒は授業中の飲食を可としています。

過去の震災から教訓を

記憶の風化にコロナが追い打ち

阪神・淡路大震災は 17 日で発生から 27 年になる。歳月の経過とともに、教訓を伝えるのが年々難しくなっているなか、新型コロナウイルスがここにも深刻な影響を及ぼしている。兵庫県淡路市の野島断層保存館。施設がある北淡震災記念公園の総支配人を務める米山（こめやま）正幸さん（55）は、自らの体験や被災者らの話を語り継いできた。

震災で地表に現れた活断層の一部を展示している野島断層保存館では、珍しさもあって当初は観光客や修学旅行生らが大勢訪れた。オープンした 1998 年度の入館者数は約 282 万人。公園には揺れを体感できる震災体験館やレストランもでき、町おこしへの貢献も期待された。しかし 20 年度はコロナ禍で、約 6 万 7 千人と減少した。初年度のおよそ 42 分の 1 の人数だ。

「小中学生の団体客が減った影響が大きい」と担当者の方は話す。今年度も緊急事態宣言で休館した時期があったことなどから、入館者数は約 8 万人にとどまる見込みだ。見学施設のためリピーターを望むことは難しく、来館者の減少はやむをえない面もあるが、運営への影響は深刻だと考えている。野島断層記念館だけではなく、他の防災教育施設もコロナの影響で来館者が減少しており、運営に大きな影響を与えている。

コロナの影響で防災教育施設の減少や講演会の多くが中止され、震災について考える機会がなくなりつつあることが懸念されている。



野島断層保存館(兵庫県淡路市)



阪神淡路大震災の当時の写真

明けましておめでとうございます。私は兵庫県出身なので 1 月になると阪神淡路大震災のことを思い出します。小学生のころには震災の教育の時間は多くあり、この記事に出てきた野島断層保存館にも小学生の時に授業の一環で行きました。震災の揺れを体験できる施設では、突然こんな風に揺れたら行動できないなと恐怖を感じました。このような施設があることで震災を経験していない人たちが学ぶ機会になります。日本人である私たちは今後も自然災害と付き合っていかなければなりません。常に意識して行動することは難しいですがときどき自然災害のことを思い起こし、防災や減災に備えていきたいですね。

(吉信)